**「ホーリー・マザー・シュリー・サーラダー・デーヴィーは、こうして信者を守る」**

2021年1月17日

逗子例会

ホーリー・マザー・シュリー・サーラダー・デーヴィー168周年生誕祝賀会

スワーミー・メーダサーナンダによる講話

於・逗子協会

**ホーリー・マザーの力**

　今日は、ホーリー・マザー・シュリー・サーラダー・デーヴィーがどのように信者を守るか、ということについて話をしたいと思います。ホーリー・マザーの生涯はとても謎に満ちていました。この謎、神秘というものは、私たちが見ても説明できないことを言います。スワーミー・プレーマーナンダが述べたように、シュリー・ラーマクリシュナは素朴な生活を送りながらも特別であるという事実は、シュリー・ラーマクリシュナがサマーディに入った時に明らかになりました。サマーディを見た訪問者たちは、シュリー・ラーマクリシュナが本当に非常に特別である、ということが分かりました。なぜなら、本当のサマーディに入ることは、真にまれな現象だからです。プレーマーナンダジーはホーリー・マザーについても言及ました。ホーリー・マザーも多くの霊的な体験や気分を経験をしたけれど、他の人に気づかれたり理解されることはほとんどなかった。

　何世紀にもわたってインドの女性は「パルダ」という習慣を守っていました。他人に見られないように、顔をベールで隠すのです。ホーリー・マザーご自身も、さまざまな人の前に出るときは、サリーをベールにして顔を隠しました。ホーリー・マザーにとってこれは、ある意味で規範や習慣に従うためでしたが、もう一つ、パルダは、マザーのサマーディや霊的な経験を他者の視線から遮るのにも役立ちました。ベールに隠されていたので、ホーリー・マザーの霊性の深さを外から見るだけで理解することはほとんどできませんでした。一方で、先ほども述べたように、シュリー・ラーマクリシュナの特別な霊性を見ることは難しくはありませんでした。ホーリー・マザーの場合、並外れた霊性の外的な兆候はほとんどありませんでしたが、マザーは本当に特別で、その霊性は計り知れませんでした。

ホーリー・マザーの自叙伝を書いたある伝記作家は、本質的なことを次のように例えました。通りに沿って高圧注意の警告が書かれた電柱があると、そこには高圧電力がケーブルにどっと流れることが分かりますが、別の部分のケーブルは絶縁体のカバーすらないむき出しのワイヤーは、外からちょっと見ただけはどれほど強い電気が流れているのかわかりません。しかし、一見安全そうに見えるそのケーブルに触れたら、すぐに灰のようになってしまうでしょう。

**ある僧の思い出**

私は最近、ラーマクリシュナ・ミッションの初期の僧侶たちの回想録を読みました。ベンガル語で書かれた上下二巻のその本は、アメリカ・ミズーリ州セントルイスのヴェーダーンタ協会のスワーミー・チェタナーナンダが話を収集したもので、非常に面白くて感動的です。この本は、私の神聖な交わりのよき代用品となっています。この本の表紙には、本に収められている回想録の僧侶たちの写真が載っています。［マハーラージは第二巻を見せられる］　今日はその中からいくつかお話しします。

スワーミー・シャンターナンダという僧侶がいました。シャンタは穏やか、静かという意味で、シャンティつまり平安という言葉の源です。彼は高い魂で常に聖音オームが聞こえていました。シャンターナンダという名は、シャンタとアーナンダの組み合わせで「穏やかさと静かさの至福」となりますが、実際とても穏やかで静かな僧侶でホーリー・マザーの献身的な侍者の一人として仕えていました。イニシエーションもホーリー・マザーから受けました。シャンターナンダジーは多くのラーマクリシュナ・ミッションに滞在しましたが、どの場所でも、特にベナレス(ヴァラナシ)で、非常に真剣に霊性の実践をしました。私はシャンターナンダジーの晩年にベルル・マトで会ったことがあります。彼はスワーミー・ヴィヴェーカーナンダ・テンプルの向いにあった二階建ての小さな宿舎に住んでいました。住まいとした一階の小さな部屋でよく『ラーマクリシュナの福音』の朗読を聞いていました。僧侶たちがシャンターナンダジーのもとを訪ねると、聖音オームが君にも聞こえるかい、とたびたび尋ねたものでした。

シャンターナンダジーが高齢になると、スワーミー・シュリダラーナンダが侍者としての名誉を与えられました。シュリダラーナンダジーの僧侶になる前の名はシャリルでした。シャリル・マハーラージは数か所のミッションでの奉仕を経て、2000年にオーストラリア・シドニーに赴任するまで、長年ラクノウ・センターの僧長を務めました。ベルルにいた当時まだ若かったシャリル・マハーラージはシャンターナンダジーと親しくなりました。シャリル・マハーラージはためらうことなくシャンターナンダジーに質問をしたり霊的なことがらについての議論をしました。シャンターナンダジーはかつてホーリー・マザーの侍者をしていたので、ある時、シャリル・マハーラージはシャンターナンダジーに、「マザーがサマーディに入っているのを見たことはありますか」と尋ねました。年長の僧はまるでその質問が聞こえなかったように黙っていました。同じ質問を辛抱強く3回繰り返しても年長僧には届いていないようだったので、少し大声で尋ねました。シャンターナンダジーは名前のとおり、落ち着いて静かな方でしたが、若い僧侶が質問を繰り返すと、ついに非常に興奮して叫びました、

「おまえはマザーのことをどう思っているのだい？　マザーはまさにサマーディの経験を授ける方なのだよ。それなのにサマーディに入った経験があるかどうかを尋ねるとは！　今日この日、一体どれだけ多くの霊性の求道者と信者がサマーディの経験を得ようとマザーに祈っているだろう。それなのにおまえは私にそのような質問をするのかね？」

シャリル・マハーラージが、すみません、そのような質問をしたのは間違いでした、と言い、シャンターナンダジーが落ち着きを取り戻すのには、少し時間がかかりました。

このやりとりから、ホーリー・マザーの霊性の高さを垣間見ることができます。本当は、シュリー・ラーマクリシュナの言動はすべて、ホーリー・マザーの力のおかげでなされた、と申し上げたら、皆さんは少し妙に感じるでしょうか？　神が人間に化身したとき、根本エネルギーの力で働きをする、とシュリー・ラーマクリシュナご自身が語りました。その証拠を考えてみましょう。私たちは皆、シュリー・ラーマクリシュナを礼拝しますが、シュリー・ラーマクリシュナご自身が礼拝したのは、ホーリー・マザーです。だから理論上は、ホーリー・マザーはシュリー・ラーマクリシュナよりも偉大と言えます。もしそうでなければ、なぜホーリー・マザーを礼拝したのでしょうか？　加えて、ホーリー・マザーは少しも恥ずかしがらずにそれを受け入れました。つまり、シュリー・ラーマクリシュナという神人の礼拝を受け入れるほどのすごい力が、ホーリー・マザーにはあったと想像できます。

　ガウル・ダシー（ガウリ・マー）というシュリー・ラーマクリシュナとホーリー・マザーの女性信者がいました。彼女はお二方をとても愛しており、たびたびドッキネッショルを訪れ、時々ホーリー・マザーのもとに滞在しました。子供にお父さんとお母さんのどちらが好き？とふざけて聞くことがありますが、賢い子供は両親を前にして何と答えるでしょうか？　もちろん「両方大好き」ですね。しかし「お母さんはすごく怒るんだもん」という答えを聞いたこともありますが。私が子供のころはお父さんがとても怖かったのですが、今はお父さんは子供にかなり甘くて寛大で、お母さんが𠮟り役のようですね。

さて、ある日、ホーリー・マザーもドッキネッショルにいるときに、シュリー・ラーマクリシュナはガウル・ダシーに「私の方が好きかい？　それとも（ホーリー・マザーを指して）彼女の方がもっと好きかい？」と尋ねました。ガウル・ダシーの答えはとても興味深いものでした。「信者は困ったとき、クリシュナ様、クリシュナ様、どうかお救いください、と言う。私をお守りください、と言う。しかしクリシュナご自身が困ったときは、ラーダー！と呼ぶ」という歌で比喩的に答えました。［一］　その答えから、ガウル・ダシーは本当は、ホーリー・マザーにより惹きつけられていた、ということは明らかです。

ホーリー・マザーがどれほど私たちを守ってくださっているか、という逸話をもう少しお話しします。ホーリー・マザーはいつも「恐れることはありません。あなたが困難な時は、『私にはお母さんがいる』とだけおっしゃい」と言いました。このことは、私たちを助けるために、私たちを守るために、救うために、マザーはいてくださる！という意味です。マザーはうわべだけで請け合われたのでしょうか？　私たちが気づいていなくても、マザーは私たちを守り、救済するために、いつもそこにおられます。これは100パーセント本当のことです。

**逸話１**

通称キショリ・マハーラージ、スワーミー・パラメーシュワラーナンダの生涯から一つお話をします。キショリ・マハーラージはホーリー・マザーの存命中は侍者として、ホーリー・マザーの生誕地ジャイランバティにいました。マザーが亡くなってからも、ジャイランバティに設立されたミッションのセンター長としてとどまりました。私はキショリ・マハーラージの晩年にお会いするという恩恵にあずかりました。

ある日、オリッサから有名な占星師がジャイランバティにやってきて、僧侶たちと面会しました。話をしているうちに、占星師の正確さを確かめようと、誰のホロスコープかを隠してパラメーシュワラナンダジーの人生のホロスコープを見せて、占星師に意見を求めました。サッと読んだ占星師は、「あなた方は私をからかっているのですか？　この人はずっと前に死んでいます！　約30年前に亡くなったはずです！　なぜ死んだ人のホロスコープを見せるのですか？」と言いました。パラメーシュワラナンダジーは25〜26歳で死ぬだろうと、出生星占いには出ていたにもかかわらず、まだ存命していました。

そのキショリ・マハーラージがラーマクリシュナ僧団の見習い僧だったときの話です。最後の誓い（サンニャーシン）を受けるには見習い僧を8~9年経験しなければならないという規則があったので、まだ受けていませんでした。 キショリ・マハーラージは24歳のころ、死が近づいているのではないか、という恐怖に突然圧倒されました。この恐れの理由や原因が何かを突き止めることができなかったのですが、内面、かなり心配でした。キショリ・マハーラージはそれで悩んでいましたが、その懸念を誰にも話さずに普段通りに仕事をしていました。ある日、排水溝に落ちて怪我をしたことが引き金となって、さらに死を意識するようになりました。そのことを本人から聞いたホーリー・マザーは、キショリに言いました。すぐにベルル・マトに行き、ラカル・マハーラージ（スワーミー・ブラフマーナンダ-初代僧団長）に会いなさい、そして早急にサンニャーシンのイニシエーションを受けるようホーリー・マザーから言われている、と伝えるのです、と。キショリ見習い僧はマザーが規則を曲げてまで言ったことに驚きながらも、マザーの望みをかなえようと、ブラフマーナンダジーに会いにベルル・マトに向かいました。

ベルル・マトでは、サンニャーシン（出家僧）になるイニシエーションの儀式は、シュリー・ラーマクリシュナの生誕祭、もしくはスワーミー・ヴィヴェーカーナンダ（スワーミージー）の生誕祭の時にのみ行われることになっていました。サンニャーシンのイニシエーションは、一年を通して無計画に行われることはなかったのです。スワーミージーの弟子で年配僧であったシュッダーナンダジーも、ブラフマーナンダジーとキショリ見習い僧の会見の際に、部屋にいました。シュッダーナンダジーは、僧団には規則とやり方があるのに、なぜ特別に手配しなければならないのだと言って、キショリ見習い僧の申し出に反対しました。キショリ見習い僧は、この申し出は私の望みや願望ではありません、ホーリー・マザーからブラフマーナンダジーへ依頼するように言われたのでそれに従っているだけです、と言いました。。それを聞いたブラフマーナンダジーはキショリ見習い僧に、スワーミー・サーラダーナンダ（シャラト・マハーラージ‐僧団の初代書記でマザーの守人）のところへ行きたまえ、そしてイニシエーションを受けるためにコルカタに留まるのだよ、と言いました。キショリ見習い僧は、ホーリー・マザーはブラフマーナンダジーからイニシエーションを受けるように言いました、それがだめでも仕方ありませんが、サーラダーナンダジーにお願いすることはできません、と言って断りました。そこでブラフマーナンダジーはシュッダーナンダジーに、サンニャーシンになる儀式の日を決めて、シャラト・マハーラージにも出席してもらうように、と言いました。最終的には、キショリ見習い僧のためだけにサンニャーシンになる儀式が行われ、スワーミー・パラメーシュワラーナンダとなりました。

ちなみに、その時から、キショリ・マハーラージを圧倒していた死に対する恐れや思いは、たちまちすべて消えました。しばらくしてキショリ・マハーラージは、なぜそんなに早くサンニャーシンになるイニシエーションを受けるように言ったのかホーリー・マザーに尋ねました。するとマザーは「息子よ、あの時あなたは死ぬ運命にあったのですよ」と答えました。サンニャーシンになるイニシエーションを受けると、運命は変わると言われています。つまりホーリー・マザーはキショリ見習い僧の運命を知り、その運命を変えたのです。占星師が言ったキショリ見習い僧の運命は当たっていましたが、その運命はスワーミー・パラメーシュワラーナンダの運命とはなりませんでした。

**逸話２**

　次は、先ほど紹介したシャリル・マハーラージ（スワーミー・シュリダラーナンダ）の話です。この話の当時、シャリル・マハーラージは、侍者としてベナレス（ヴァラナシ）でシャンターナンダジーと同室に住んでいました。その頃、シャンターナンダジーは少しずつ痩せはじめていましたが、ご自身の状態に気づいていませんでしたし、気にもとめていませんでした。シャンターナンダジーは愛情から、シャリル・マハーラージのために食事や飲み物を残しておきました。そのうちに、シャンターナンダジーは結核にかかったことが分かりました。当時、結核の薬はまだ開発されておらず、カルシウムとタンパク質をたくさん摂取して多くの休息をとることだけがその養生法でした。シャンターナンダジーには病状を知らせることなく、ヒマラヤの静かな自然環境に囲まれた早期結核療養所に移る手筈が整えられました。

ベルル・マトの本部が手配をし、シャリル・マハーラージに同行を求めました。シャリル・マハーラージは結核のことをシャンターナンダジーには知らせませんでした。移動の日が来ると、シャンターナンダジーは「シャリルよ、なぜベルル・マトの本部は私をベナレスから別の場所に移動させたいのだろうか？」と尋ねました。シャリル・マハーラージは理由を明かすことなく、あいまいに答えました。一般的に僧侶は強烈な霊的雰囲気と長い伝統のあるベナレスに滞在することを好みます。療養所に着くと、スタッフが担架をもって迎えに来ました。担架を見たシャンターナンダジーは驚きました。担架で運ばれるとき、入り口の上の病院名を見て全てを理解したシャンターナンダジーはシャリル・マハーラージに言いました、「ああ、私は結核だったのですね」。シャリル・マハーラージは何も言いませんでした。

自然に囲まれ、有能なスタッフとトイレ付きの個室の宿泊施設はとても快適でした。しかし入院後、シャンターナンダジーは非常に厳格になり、まったく話をしなくなりました。シャリル・マハーラージは結核だと知ってショックを受けたのかもしれないと思い、普段通りにシャンターナンダジーに仕えました。

数日たってもシャンターナンダジーは一言も話しません。三日間、シャリル・マハーラージはシャンターナンダジーほどの先輩僧が死を恐れるはずはないのに、そんなにもショックを受けるものだろうか、急に黙り込んでそのまま何もしゃべらない他の理由は何だろうか、と疑問が続きました。三日後、突然、シャンターナンダジーはほほえみながら「シャリルよ、元気かい？」と聞きました。

シャリルは「マハーラージ、この数日はどうされたのですか？　マハーラージはここに着いてから私に一言も話をなさいませんでした」と返答しました。

「私がこれから言うことを信じるかい？」とシャンターナンダジーは言いました。「結核にかかっていると分かった時、この治療法のない感染症を近親者にもうつしたのではないか、と心配になったのだよ。私はお前に食べ物と飲み物を分け与えたことを思い出したので、お前も結核に感染したのではないか、と思ったのだ。私は年寄りだけれど、お前は若い。だからお前が結核で死ぬようなことがあれば、私は死んでも安らかに休めない。だからこの三日間、私は昼も夜もホーリー・マザーに祈っていたのだよ。私はホーリー・マザーに祈って祈って祈り続けたのです」

「昨夜の真夜中ごろにホーリー・マザーがあらわれて『息子よ、何か私に聞いてもらいたいことがあるのですか？　あなたはすでにすべてを手に入れたではありませんか、それ以外になにを祈ることがありましょう？』とおっしゃるので、この青年は私の面倒を見ています。私は、愛情からこの子に同じ皿から食べさせたので、結核がうつっていないかと心配なのです。もしこの子が結核で死ぬようなことがあれば、私は死んでも平安を持てません。マザー、私の望みはシャリルが死ぬときには結核以外の原因で死にますように、ということです。マザー、これが私の望みです。すると、マザーは『わかりました！』と言って姿を消された。私の結核がお前にはうつらない、ということをマザーが保証してくださったので、私は今、平安なのだよ」

シャリル・マハーラージも体重が減ったので検査をすると、感染症が見つかったので、本部はシャリル・マハーラージに病院を去るように言いました。一時は最悪の事態が懸念されましたが、シャリル・マハーラージは適切な治療と食事のおかげですぐに回復しました。約30年後、シャリル・マハーラージはコルカタのウドボーダン（マザーの家）を訪問した際に、このシャンターナンダジーとの経験を語りました。シャリル・マハーラージはウドボーダンの僧侶たちに「ほらね、私は80代ですが、結核の影響を受けたことはありません」と言いました。実際、93歳で今もオーストラリアのシドニーでかなりお元気です。

**逸話３**

皆さんにお話ししたい三つ目の話は、コロナウイルスにまつわる現代の実例です。ラーマクリシュナ・ミッションの英語本の出版社であるアドヴァイタ・アーシュラマが印刷を依頼するトリオ・プロセスという印刷所があります。四人兄弟の三人がトリオ・プロセスの所有者ですが、そのうちの一人は腎臓移植など、数々の病気に何年も苦しんでいました。彼は弱っていたので、免疫は大幅に低下していました。そのために不規則な生活をしないように、仕事や活動や普段の生活にも細心の注意を払っていました。

彼は2020年6月に発熱し入院しました。そして検査の結果、コロナウイルスの陽性が判明したのです。彼の病状は急速に悪化し、肺容量の75パーセントが閉塞したため、呼吸はとても苦しいものとなりました。医者は家族に、回復する望みはほとんどないのでもうすぐ死ぬことを覚悟しておくようにと言いました。

この紳士はアドヴァイタ・アーシュラマの僧侶たちだけでなく、ドッキネッショルにあるサーラダー・マトの尼僧たちとも知り合いでした。彼は妻にサーラダー・マトの尼僧と、僧侶に連絡を取って、彼のために祈ってもらうようにと言いました。彼自身もホーリー・マザーに「マザー、マザー、マザー、どうか私をお救いください」と悲痛な思いで祈りました。

6月8日の夜、彼は年配の女性が病室のベッドの近くに立っているのに気づきました。きっと看護師だなと思ったものの、女性がマスクをしていなかったのでその理由を尋ねました。答えはなかったので、彼は反対方向に寝返りました。それでもその女性はまだそこに立っていました。その後、彼の病状は急速に回復し、二日後のテストではコロナウイルスは陰性になっていました。医者たちは当惑しましたが、患者は信者でしたので、その夜の訪問者はホーリー・マザーご自身で、ホーリー・マザーの恩寵で救われたことが分かっていました。

つまり、信者を守り、助けます、というホーリー・マザー・シュリー・サーラダー・デーヴィーの保証は、絵空事ではないのです。「恐れることはありません。困ったときはいつも『私にはお母さんがいる』とだけおっしゃい」という言葉は本当に真実です。私たちはこのことを信じ、良い日も悪い日も彼女にお任せしなければなりません。これが、今日、ホーリー・マザーの生誕祭のメッセージです。

［一］『ホーリー・マザーの生涯』　69頁